様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年６月１５日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７００４９６
研究課題名（和文）　琉球舞踊における動作単元データーベース『動作辞書』の構築

研究課題名（英文）　Creation of the Movement Dictionary of Okinawan Classical Dance

研究代表者
波照間　永子　（HATERUMA　NAGAKO）
明治大学・情報コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：８０３３６４８７

研究成果の概要：本研究は、琉球舞踊の技法「動作単元」のデータベース化を企図したものである。動作名称・動作特性・伝承方法等の総合的なデータを記録しているが、今回は、伝承方法に焦点をあて、5 名の県指定無形文化財保持者およびそれに準じる者に聞きとり調査を実施した。その結果、1960 年代初頭の流派発足以前は、複数の師から十八番芸を学ぶ「複数師匠型」の伝承スタイルであり、動作単元の定義や伝承方法に多様性が認められることが明らかになった。これらの多様性をも視野に入れたデータ内容の検討が必要である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,500,000	0	1,500,000
２００７年度	1,000,000	0	1,000,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	300,000	3,800,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学
キーワード：琉球舞踊、身体、技法、データベース、動作、伝承、教育

１．研究開始当初の背景

(1)これまでの研究

本研究は、2002 年度～2005 年度に実施した「琉球舞踊における所作単元データベース構築のための基礎研究」（科研費若手研究 B）の延長に位置づけられる。同研究では、未だ体系化されていない琉球舞踊の技法（動作単元）を、動作名称・動作特性・伝承方法（伝承語）などの関連する諸情報をもとに検索項目の抽出を行い、データベースの試作および試用を実施した。

(2)本研究の課題

ただし、本試作データベースは、①動作単元の意味（その動きが何を表現しているか）を表示する「意味特性」項目がないこと、②一名の県指定無形文化財保持者のみのデータをもとにしたものであること、などの課題が残された。

２．研究の目的

そこで、この２つの課題を検討すべく、次の研究を実施した。

(1)琉球古典舞踊の主要な演目を分析し、「意味特性」データの抽出を行う。

(2)インフォーマントの対象を広げ、試作デー

タベースの内容を検討する。

３．研究の方法

(1)「意味特性」抽出のための構造分析

「意味特性」の抽出に際して、Dr. Kaepplerがトンガの舞踊の構造分析に用いたLinguistic Method*を援用した。

＊KAEPPLER, Adrienne L. “Method and theory in analyzing dance structure of Tonga dance.” *Ethnomusicology 16(2)*：173-217、1972年

(2)伝承の系譜作成と伝承方法に関する聞き取り調査

対象：流会派の異なる５名の県指定無形文化財保持者およびそれに準じる者

本データベースの内容を検討する際の下作業を行った。具体的には、各インフォーマントが「誰から教えを受けたのか」を詳細に問い、伝承の系譜を作成した。

さらに、４名のインフォーマントについては、次の比較調査を実施した。主要な動作単元「ガマク入れ」技法について、「どのように教わったのか」「自身がどのように教えているか」といった伝承方法や伝承語に関する聞き取り調査を実施した。

インフォーマントは次の通りである。調査の実施年順に記載する。インフォーマントの敬称は紙面の都合上省略する。

① 児玉洋子（渡嘉敷守良流　東京沖縄芸能保存会　代表）
故　児玉清子（1914-2005：享年91歳）の伝承の系譜を調査、2005～06年度実施
② 志田房子（重踊流初代宗家）
伝承の系譜を調査、2007年度実施
「ガマク入れ」技法調査、2008年度実施
③ 大城政子（寿乃会、家元）
伝承の系譜と「ガマク入れ」技法調査
2008年度実施
④ 親泊久玄（親泊本流ニ代目家元）
伝承の系譜と「ガマク入れ」技法調査
2008年度実施
⑤ 玉城節子（玉城流翔節会家元）
伝承の系譜と「ガマク入れ」技法調査
2008年度実施、

なお、上記の調査のうち、①②③は研究代表者である筆者（波照間）が担当した。　④は大城ナミ氏（研究協力者）に、⑤は花城洋子氏（研究協力者）に聞きとり調査を委託した。所属等については本報告書末の研究協力者プロフィールを参照いただきたい。

４．研究成果

(1)「意味特性」項目抽出のための構造分析結果

Dr. Kaepplerが示した「意味特性」指標であるLinguistic Methodを琉球舞踊に適用した。その結果、トンガの舞踊が歌詞と対応した（Poetic Movements）写実的動作であるのにたいし、琉球舞踊は「作品全体」の意味内容をシンボライズした抽象性（Symbolic Movements）を有すことから、Linguistic Methodの分析指標を、そのまま援用することに限界が認められた。

琉球舞踊の「意味特性」を、既存の分析指標を借用して分析するのは困難であることから、独自の分析指標の考案が求められる。

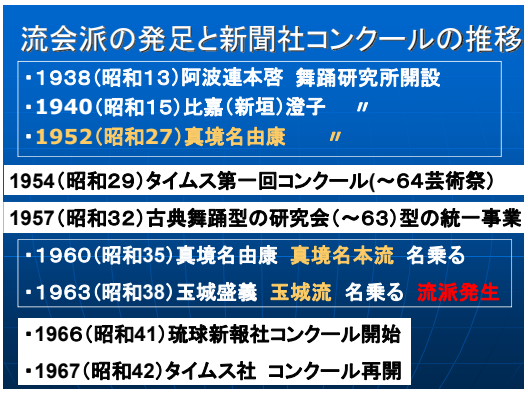
(2) 琉球舞踊の伝承組織：流会派の概況とインフォーマントの位置

調査結果を記す前に、琉球舞踊の流会派の概況についてまとめておきたい。

琉球舞踊は、王朝時代、中国や大和の役人を歓待する目的で演じられた。そのため、琉球舞踊の流派は一つであったとされる。王朝崩壊後は、商業演劇の名優らに受け継がれた。なかでも渡嘉敷守良・玉城盛重・新垣松含の活躍が著しく、現存する舞踊家も、この三系統の流れをくむものとされる場合が多い。

なお、琉球舞踊に「～流」「～会」などといった流会派が誕生したのは、1960年代初頭である。1960年代後半には、沖縄タイムス社と琉球新報社２社がコンクールを実施。各流会派は２社の傘下にあり、「新報系流会派」と「タイムス系流会派」と称される（表１）。本研究のインフォーマントのうち１名（児玉）は渡嘉敷守良の直弟子であり、「新報系流会派」に属する。他の４名は玉城盛重の直弟子または孫弟子である。直弟子の大城政子と志田房子は「タイムス系流会派」に、孫弟師の親泊久限と玉城節子は「新報系流会派」に属する。

表１．琉球舞踊の伝承組織の推移



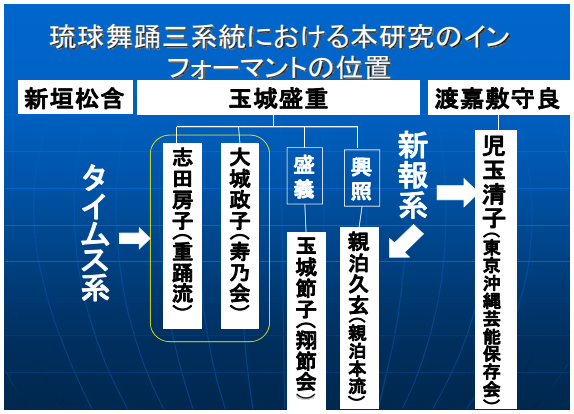


図１　インフォーマントの系譜
（三系統との関係のみ記載）

(3) 渡嘉敷守良の直弟子　児玉清子の系譜とオーラル・ヒストリー

2005 年～06 年にかけて、渡嘉敷守良の直弟子である児玉清子のライフ・ヒストリーを調査し、次のような結果を得た。

① 児玉は渡嘉敷守良だけから教わったのではない。
② 玉城盛重の弟子である玉城盛義など数名からも教えを受けていた。

したがって、琉球舞踊の流会派は、守良・盛重・松含のいずれかの流れをくむとされるが、伝承の実態を調査すると必ずしもそうとはいえない。少なくとも流会派発足以前は、演目ごとに複数の師につくのが一般的であったといえる。 したがって、今後、流会派間の技法の比較をする前の基礎作業として、演目ごとの系譜の作成が急務であると認識した。

本研究の成果および児玉のライフ・ヒストリーと芸術思想、芸歴、自主公演プログラムデータを「舞踊家オーラル・ヒストリー　－児玉清子の生涯－」(2007 年)と題する論文に公表した。

(4) 玉城盛重の直弟子　志田房子の系譜

上記、児玉清子の調査結果を受けて、2007 年、玉城盛重の直弟子である志田（根路銘）房子も同様の調査を実施した。結果は次の通りである。

① ３歳から４年間、盛重に古典老人踊り・若衆踊り他を師事。
② 盛重亡きあとは、嵩原安詩の流れをくむ田島清郷と金城宗善に古典女踊りを、真境名佳子にコンクール課題曲女踊りのひとつ「かせかけ」を 、仲井真盛良に雑踊りと古典ニ歳踊りを師事。さらに雑踊り「本花風」を新垣義志に・・・というように、実に 10 名から教えを受けていた。

前年に行った、渡嘉敷守良の弟子である児玉清子と同じく、複数の師から十八番芸を学んでいたことがわかる（図２）。

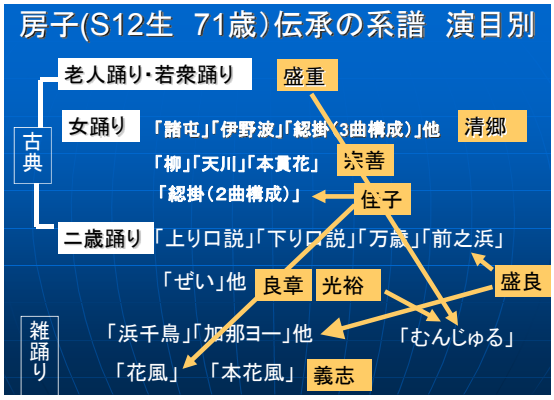


図２　志田房子　伝承の系譜（概略図）

本調査の成果を、芸歴、公演プログラムリスト、記録映像リスト等の諸データとともに「根路銘房子の『語り』にみる伝承の系譜」（2009 年）と題する論文にまとめた。

(5) 玉城盛重の直弟子　大城政子の系譜

玉城盛重の直弟子　大城政子の結果は次の通りである（図３）。

① 12 歳で盛重に師事、古典舞踊の老人踊り・若衆踊り・ニ歳踊りを学ぶ。
② 盛重亡きあとは、嵩原安詩の弟子である比嘉清子と生盛貴に「柳」「天川」「芋引」などの古典女踊りを、タイムス社コンクール受験対策として、真境名佳子に女踊りコンクール課題曲を 、組踊を真境名由康に師事した。さらに、田島清郷と西平守模にも監修指導を受けた。

以上、合計７名から教えを受けていた。

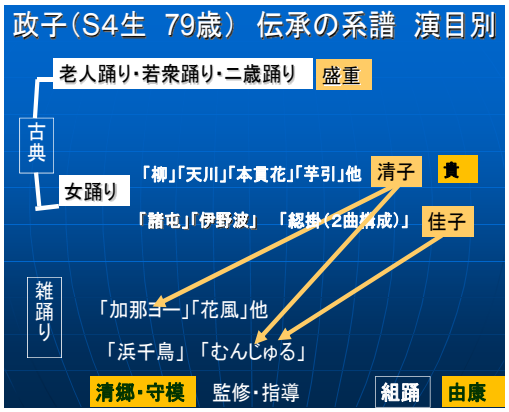


図３　大城政子　伝承の系譜（概略図）

(6) 玉城盛重の孫弟子　親泊久玄の系譜
（聞き取り担当：大城ナミ）

親泊久玄は、親泊興照に直接の教えを受けた。興照が盛重の直弟子であったことから、盛重の孫弟子という位置にある。結果は次の通りである（図４）。

① 久玄は、興照にすべてのジャンルをみてもらいながら、古典女踊りを比嘉清子と真境名佳子に 、二歳踊りを盛重の弟子である国場盛保に 、組踊を由康に教わっていた。

② 師である興照は、劇団生活で培った「芸能は皆のもの」という意識があり、今のような流派にこだわった考えはもっていなかった。団員たちにそれぞれ得意とする持ち芸があり、当たり役を尊重しないといけない、その 役をとってはいけないという思想のもと、他の師匠のもとに学びにいかせたという。

久玄も、先に記した志田房子や大城政子と同様、複数の師についていたといえよう。その背景には、興照の言にあるように「芸能は皆のもの」「当たり役の尊重」という思想が強く働いていたからだと考えられる。

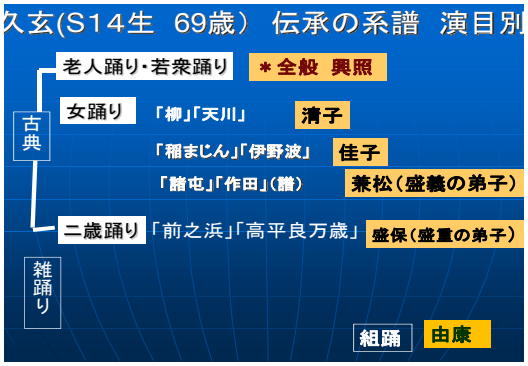


図４　親泊久玄　伝承の系譜（概略図）
（大城ナミによる調査結果より作図）

(7) 玉城盛重の孫弟子　玉城節子の系譜
（聞き取り担当：花城洋子）

玉城節子は、盛重の甥にあたる盛義に師事した。盛義は、1963 年、他に先立って「玉城流」という流派を立ち上げた人である。結果は次の通りである（図５）。

① 節子は、「本花風」を新垣義志に教わる以外は、ほとんどすべてを盛義だけに師事している。

② 盛義ははじめて、琉球舞踊に「流派」を発足した人であり、節子は盛義以外から教わるべきではないという意識を強くもっていたようである。

このような、一人の師匠のみに師事する「一師匠伝承型」の教授システムは、現在、琉球舞踊界に広く流布しており、複数の師につくことは忌嫌われる風習になっている。

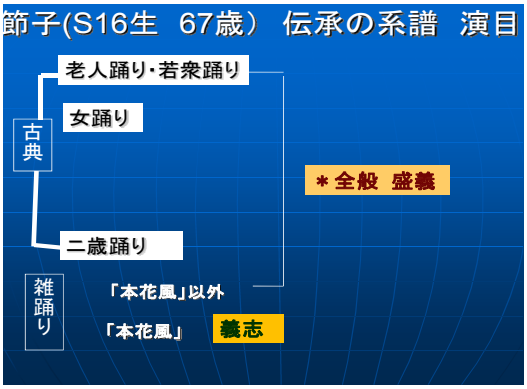


図５　玉城節子　伝承の系譜（概略図）
（花城洋子による調査結果より作図）

本調査結果から、演目ごとの十八番芸を複数の師から学ぶ「複数師匠伝承型」から「一師匠伝承型」へと移行するにあたって、玉城盛義による流派立ち上げが少なからず契機となっていたと推察される。

(8) 十八番芸の系譜と伝承

インフォーマント別の結果をみてきたが、まとめると次の仮説が想定できる（図６）。

① 盛重の系譜とひくとひとくくりで語られる４名の無形文化財保持者であるが、盛重以外の流れも想定できる。

② 古典ニ歳踊り・老人踊り・若衆踊りは読谷山親雲上の流れをくむ盛重が主に伝授している。

③ 古典女踊りは、嵩原安詩（親雲上）の流れをくむ演目と、盛重に流れをくむ演目に大別される。

④ 雑踊り「本花風」は新垣義志により伝えられていた。

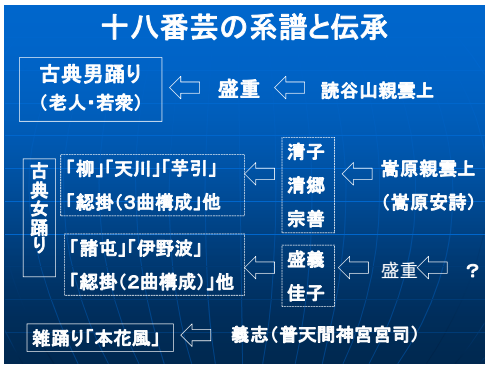


図６　十八番芸の系譜と伝承

(9) 玉城盛重系流会派のインフォーマントを対象とした「ガマク入れ」技法の比較

盛重の流れをくむインフォーマント（志田房子・大城政子・親泊久玄・玉城節子）を対象に、「ガマク入れ」技法に関する聞き取り調査を実施した。「ガマク入れ」は琉球舞踊の身体使いの土台とされる基本技法（動作単元）である。以下に大まかな結果を記す。

① 身体部位としての「ガマク」

身体部位としての「ガマクはどこですか」という質問にたいし、ほぼ共通の認識が見られた。 脇腹および肋骨下の腹側部として捉えており、これは辞書の「ガマク」の狭義の意味と同じで、「帯をしめる」という着付け技法との関連がうかがえる。

② 舞踊技法「ガマク入れ」とその伝承方法

４名のインフォーマントのうち３名が「ガマクを入れる」という言葉を使って師から教わっていた。

身体部位としての「ガマク」が、共通の部位を示していたのにたいし、「ガマクを入れるときに意識する部位はどこか」という質問では多様な返答がみられた。身体部位としてのガマクと同位置にとらえるもの、股関節の片側もしくは両足の股関節ととらえるもの、帯を締める位置から股関節までの腹部全体としてとらえるものなどである（図７）。

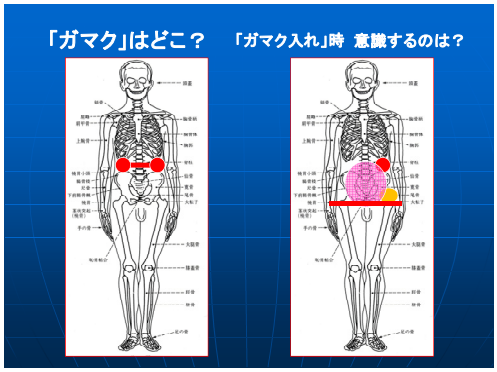


図７　身体部位としての「ガマク」と「ガマク入れ」時に意識する部位

主として、盛重の直弟子は股関節を意識し、孫弟子は脇腹および肋骨下の腹側部（帯を締めるくびれ部分）を意識していた。戦前、男性が活躍していた時代は女性らしさである屈曲・捻り・斜めのラインなどの曲線美を、「股関節」を 主に行っていたが、戦後、女性舞踊家の台頭により、曲線美を出す主な身体部位が「ウエスト」部分へと移行していったのではないかと推察される。

（付記・謝辞）

先に記した研究成果の(4)～(9)は、日本スポーツ人類学会（2009 年３月末）にて口頭発表した。同発表をまとめた論文を、『2008 年度ポーラ伝統文化振興財団助成事業成果報告書』に公表する予定である。

なお、同研究では、花城洋子氏（名桜大学）と、大城ナミ氏（親泊本流親扇照志野の会）に聞き取り調査を委託した。同委託調査費はポーラ伝統文化振興財団の助成による。その他の調査費については本補助金より支出した。

最後に、本研究にご協力を賜りました児玉清子氏、大城政子氏、志田房子氏、親泊久玄氏、玉城節子氏に、心より謝意を表します。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 波照間永子・花城洋子・大城ナミ、「琉球舞踊における玉城盛重系流会派の系譜と伝承」、『2008 年度ポーラ伝統文化振興財団助成事業成果報告書』、2009 年（印刷中）
② 波照間永子、「根路銘房子の『語り』にみる伝承の系譜」、『2007 年度ポーラ伝統文化振興財団助成事業報告書』、5-26、2009 年、査読無し
③ 波照間永子、「琉球舞踊における記録法の展開と課題」、『沖縄芸能協会創立 40 周年記念誌』、119-204、2008 年、査読無し
④ 波照間永子、「舞踊家オーラル・ヒストリー　－児玉清子の生涯－」、『琉球・沖縄研究』、創刊号、61-88、2007 年、査読有

〔学会発表〕（計４件）

① 波照間永子・花城洋子・大城ナミ、「琉球舞踊における玉城盛重系流会派の系譜と伝承－ガマク入れ」技法の多様性－」、日本スポーツ人類学会第 10 回大会、2009 年３月 29 日、早稲田大学国際会議場
② 波照間永子、「琉球舞踊にみる流会派の系譜－オーラル・ヒストリー研究の事例から－」、日本体育学会第 58 回大会、2008 年９月５日、神戸大学
③ 波照間永子、「舞踊学におけるオーラル・ヒストリー研究の課題と展望 ： 琉球舞踊のアーカイブ化をめざして」、 比較舞踊学会第 17 回大会プログラム．20-21 、2006 年 11 月 25 日、文化女子大学
④ 波照間永子、「琉球舞踊にみるオーラリティ」、沖縄文化協会公開研究発表会、2006 年 10 月 23 日、早稲田大学国際会議場

〔図書〕（計１件）
① （共著）波照間永子、「琉球舞踊と身体―舞踊技法研究への誘い―」、勝方恵子他編『新沖縄学入門』（仮題）、昭和堂、印刷中（総ページ数：400 字×45 枚）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
2009 年８月に公開予定

６．研究組織
(1)研究代表者
波照間　永子（HATERUMA NAGAKO）
明治大学・情報コミュニケーション学部・准教授
研究者番号：８０３３６４８７

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者（聞き取り調査委託）
花城　洋子（HANASHIRO YOKO）
名桜大学・人間健康学部・准教授

大城　ナミ（OSHIRO NAMI）
親泊本流親扇照志野の会・会主